



アジアからの“留学生”

大学史資料センター助教 檜皮 瑞樹(ひわみずき)



高田早苗・塩澤昌貞と清国留学生（1906年頃）

早稲田大学は戦前期からアジアを中心として多くの“留学生”を受け入れてきた。

学苑を卒業した最初の“留学生”は、朝鮮半島出身の洪 爽鉉（ホンソクヒョン）である。1897年に東京専門学校（早稲田大学の前身）邦語政治科を卒業した洪は、**免費生**として学費を免除され学苑で学んだ。在学中から朝鮮人留学生親睦会の指導者として活躍し、帰国後は官立漢城高等学校長などの要職を歴任した。洪 爽鉉以外にも、明治30年代には8名の朝鮮人学生が学苑を卒業している。また、1915年には林 時珍（りんじちん）ら3名の台湾人が初めて学苑を卒業した。

一方、中国大陸からの“留学生”は、清国より派遣され、1899年に入学した唐 宝鐸（とうほうがん）としょう 翼きの2名と、銭 恂（せんじゅん）が仲介した3名の学生が最初である（3名の詳細は不明）。また、学苑は清国からの留学生を積極的に受け入れるため、1905年に清国留学生部を創設した。1910年に廃止されるわずか5年の間に2,000名余の学生が学苑で学んだ。

1910年の“韓国”併合以後、朝鮮半島からの“留学生”は急増した。台湾からの学生も含めて、彼らは“外地学生”として位置付けられ、厳密な意味での“留学生”としては扱われなかった。さらに、植民地からの留学には、内地と植民地との教育システムの不連続、日本政府や総督府による渡航制限などの困難が伴っていた。そのような状況下でも、多くの“留学生”が学苑で学び、帰国後にそれぞれの“母国”で活躍した。

1919年の三・一独立運動で独立宣言文を起草した崔 南善（チェナムソン）、東亜日報や高麗大学の創設者であり李 承晩（イスンマン）政権で大韓民国副統領を務めた金 性洙（キムソンズ）、中国共産党創設メンバーである李 大釗（りたいしょう）・陳 独秀（ちんどうしゅう）、戦後の中国において対日外交で活躍した廖 承志（りょうしょうし）、台湾における社会主義運動の先駆者である王 敏川（おうびんせん）などが挙げられる。



早大ウリ同窓会卒業生送別記念（1936年2月）